



TITLE:

各地よりのたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地よりのたより. 天界 1939, 19(222): 382-384

ISSUE DATE:

1939-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167875>

RIGHT:

各地よりのたより

大阪プラネタリウムだより

□プラネタリウムに珍らしい事件が起きた。これは日周運動用のモーターの故障である。大きな唸りが出て來たので、原因調査の末、東京ツイス本社より取換へのモーターを持参し、一休日を利して、すつかり修理が成つた。こうした場合にも、プラネタリウムの機構部分の精巧なことに感心させられる。

□聞く處によれば、滿洲新京に新プラネタリウムを設置する計畫がある由で、これは過日の山本博士の御渡滿の際にも主唱せられた賜物と思はれるが、同建設計畫につき、7月末調査員が來館された。大いに悦ばしいニュースである。拓けゆく滿洲に天文興亞の太陽となることだらう。

□7月になると毎日夜間公演は非常な大賑ひであるが、これは天文への市民の認識向上の一端と見られる。火星が接近して來たので、誰れしも、ジツとしてゐられないやうな空氣が見られる。そして色々な形式で觀望會などが計畫され、開催されて、こゝしばらく大阪市附近では大人氣！ 科學館では8日2日から5日間、天文協會員の熱心な援助により、望遠鏡の提供、説明などで、市民に公開するが、これも亦非常に期待されてゐる。この頃わが天文協會の權威的存在が認められてゐる所以でもある。

□既報の「戦線の星圖」は尙續々戦線の勇士より「大東亞天文協會」と宛名書して申込みがある。近日、更に秋の星空を作製して發送する豫定とある。戦場にも星の榮光は麗しく燦くであらう。

□7月28日夜は火星講演會(筆者講)を開いた。この時の入場者は、開館以來のレコードを破つて、終に「満員につき入場お断り」となつた。

□8月1日夜、西下中の賀川豊彦先生を迎へ、「天文趣味の夕」を催し、「新宇宙觀と新人生觀」の題下に、講演中プラネタリウムの運用と相俟つて、プラネタリウム天文學の大使命を獅子吼され、臨席の市電氣局長、部長、館長、各館員を始め、特別市民のために、或は自作の「星座の歌」を合唱し、或は銀河系から物的宇宙の大を解き、又は太陽系の生命を示し、珍しい日月大遊星の引力

影響説を提唱され、人生への密接な関係を教へて、こゝにプラネタリウムの有用性を實際に運轉し、展開して、星空への深へ愛着力を高唱され、満堂等しく宇宙空間を馳せる思ひであつた。大盛況裡に21時半閉會、退館する人々の口に「星座の歌」が聴かれた。(8, 2—高城)

ペ ル ー だ よ り

(前略) さて昨今地震騒ぎが隣國智利にあり、當地の人心も穏かならざる時、三月20日及22日(小生觀測せり)の兩夜にわたり、天界に不思議なる現象出現、民心少なからず動搖致しました。當日の Comercio 紙を同封致します。小生日誌中より、“去る日曜夜よりリマ上空に輝雲現はる。本夜も(22日)7時頃天頂よりやゝ北西の空に淡き一面の白雲あり。一塊の(楕圓形の)光が時計の針と反對の方向に、かなりの速度(早き雲の速さ)にて圓形軌道上を去り、時には三ツ四ツ同時に現はるゝことあり。光度極めて微、白雲と僅かに區別し得る程度、白雲よりすべりて青空に出る時は同時に消失す。此の現象約30分づゝ。ミラフロレスに電話を通じ報告したるも、同地にては全く見えす。故に比較的低空に於けるものならんか?”一寸不思議でありましたから、御笑草までに報告申し上げます。昭和14年3月27日

在リマ 榊 後 彫

鳥 取 よ り

(前略) まちにまつて居りました昨夜の月食の御報告を申上ます。殊にねらつて居りました「月の黄道光」を、月食時に確めようと前々からねらつてをりましたが——昨夜は朝から良い天候で、夜に入つて一點の雲もなく、晴れ渡つた空に、月食は徐々にかゝつて参りました。私は日本海の沿岸の鳥取砂丘に夜間演習に出て居りましたが、その歸りに觀測したのでございます。4日0時10分にわたつて、シーイング良好の空に注意いたしました。月の黄道光らしいものは認めませんでした。微光の星々まで見える美しい空でしたが——

右取敢へずお知らせ申上ます。(後略)

5月4日

本 田 實

瀬戸だより

八月二日に山本奥様の御病氣を天界で知り、急遽上洛、御見舞を兼ねて、ゼラチンの購入やら、エリスロシン及びチヂアニン色素の入手やらで奔走したり、雑用で京阪神、大津、奈良方面迄知人の訪問で、あわただしい旅行であつた爲、相當あちらこちらに迷惑をかけた事と思ふ。京阪地方の暑さにはやりきれぬ。十二日に歸村。

廿日には、山本博士の來村を得、瀬戸村小學校講堂にて講演會を開催した。會衆約百名。此の寒村としては非常な盛會であつた。演題は特に指定せず、北支滿蒙現地の狀況、天文と人生の事など、約二時間の講演後、引續き座談會の形式で更に一時間、文字通りの長期抗演?となり、暑中の折柄、博士には實に恐縮であつた。勿論、此の努力の結果は會衆に與へた感銘も、はかり知れぬものがあろう。好結果に終了した事を祝福したい。(S. K. 生)

口繪“火星見取圖集”解説

口繪に集録しました火星見取圖4枚は、全部略々同位置(大體 0° を中心として)のものを撰出しました。次號に更に4枚掲げます。

各圖ディスクの中央邊に東西に延びてゐるのはサベウス灣で、其先端は、火星面經緯度の原點 0° の通つてゐるアリンの爪で、非常に濃い。サベウス灣の左方の濃い三角形は有名な大シルチスで、火星面中最も濃い模様で、常に縁黑色を呈してゐる。サベウス灣の右側はマリガリチフェル灣で、今年は比較的淡い。サベウス灣の北方にバンドラ海峡が有るのだが、今年は非常に淡く、殆んど消失してしまつたと云つて良い。

シルチスの北方に圓形のヘラス大陸が其半分を表してゐる、

サベウス港の中央シゲウス港からは南方へフィソン、エウフラテス、ラボタス等が見られ、これ等は各々淡黒い部分の兩側に沿つて、コントラスト効果が想起される。

觀測日の差異によつて南極冠の大きさに變化が見られるのに御注目下さい。器械の口径によるディテールの認め方と個性が現れてゐます。(伊達英太郎)